

On the Relation Between Erythrocyte Sedimentation Rate and Hemoglobin Volume

BY Minoru Naitou

Dr. Kanai's office of internal medicine,
Matsumoto city
(Chief: Dr. I. Kanai)

It has been observed that the more severely anemia developed, the more markedly erythrocyte sedimentation rate was accelerated.

According to my results, however, anemic patients showed rather lower value than that of

experimental anemia produced in test tubes and its value even in extremely anemic patients was observed considerably within normal range and the degree of acceleration varies in anemias depending upon its causes.

Therefore it is not reasonable to correct uniformly the sedimentation rate in various anemias by the value obtained from experimental anemia employing normal blood as some authors advocate it.

I suspect that there may be some factors to delay the sedimentation rate in anemic patients.

慢性オートン中毒の七例

昭和30年10月22日 受付

信州大学医学部第二内科教室 (主任: 大島良雄教授)

宮 下 務 栗 田 広 志
丸 山 大 司 鄭 士 麟

I. 緒 言

1950年英国の Adamson^①等により合成された「アミノブテン」系化合物中 3-Dimethylamino-1, 1-di-(2'-thiethyl)-but-1-ene 塩酸塩は「モルヒネ」と同様な鎮痛平滑筋痙攣緩解作用が注目され、吾が国でも合成に成功しその基礎並に臨床実験により臨床的価値が認められ、「Ohton.」の製品名で市販されるに至つたが、慢性中毒患者を多数認めるに至つた為新に麻薬に編入せられた。既に飯塚^②、柴山^③、辻野^④、上村^⑤、諏訪^⑥等により報告せられて居るが、吾々も「Ohton.」の慢性中毒患者7例に就いて観察する機会を得たので報告する。

II. 症 例

症例は19才より30才迄の男子6例と24才の女子1例で、男子1例に梅毒反応陽性であつた以外に特記する様な疾患を有せず、他の麻薬、覚醒剤等は併用して居なかつた。使用期間は最短1ヶ月最長13ヶ月で、平均使用期間は8.3ヶ月であり、1日の最高使用量は200mgより2000mgの間にあり、最高使用量の平均は1日1100mgであつた。使用方法は女子1例は皮下注射、男子6例は主として静脈注射であつたが、末期には静脈の荒廢のため皮下注射に移行して居たものが3例あつた。「Ohton.」使用の動機としては腹痛に依るもの3例、その他不眠、好奇心によるもの等が認められた。之等患者の従来性格には意志不定精神病質的傾向が強いと言はれる。^⑦

III. 中毒期間に於ける症状

- 1) 精神症状 無為茫乎を全例、記憶力減退を6例、発揚を4例に認めた。1例に錯聴被害妄想を認めた。
- 2) 身体症状 嗜眠、便秘を全例に認め、食欲不振4例、その他口渇、倦怠、発汗、浮腫を認めるものがあつた。性慾は4例中消失1例減退2例正常1例であつた。

IV. 初診時身体所見

栄養は不良及びやゝ不良各3例、四肢に浮腫を認めるもの2例があつた。肝脾腫大を認めるものは1例もなかつた。血圧は全例正常範囲内にあり、7例に於ける最大血圧の平均は122mgHgで、最小血圧の平均は73mgHgであつた。腱反射は2例減弱、1例亢進、4例正常で一定の傾向を示さなかつた。注射局所の静脈は高度の荒廢を示し、殆んど完全に内腔の閉鎖がうたがはれるものも認められた。又静脈血流の障碍によると思はれる四肢末端の「チアノーゼ」及び浮腫を認めるもの例2.があつた。

V. 禁 断 症 状

不眠、下痢を全例に認めた他、冷汗6例、全身倦怠5例、心悸4例、四肢冷感、流涙、鼻汁分泌過多各2例、口渇、振顫、易怒各々1例に認めた。禁断時の不安感を3例に認めたが、薬品欲求は1例に認めたのみであつた。この禁断症状と思はれる状態は3日乃至10日の間に消褪し、平均持続日数は4.6日であつた。詳細は表Iに示す。

表 1 中毒期間の症状 (1)

	無為 汗平	発 揚	記 録 減	錯 聴	妄 想	眠 気	便 秘	口 渴	倦 怠	食不 欲振	発 汗	浮 腫	羸 瘦	性 欲
石川	+	-	+	-	-	+	+	+	-	+	-	-	±	減
高須	+	+	+	-	-	+	+	-	-	+	-	-	±	正 消 失 減
小山	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	±	
山梨	+	+	+	-	-	+	+	-	-	+	+	+	+	
松永	+	+	+	-	-	+	+	+	-	-	-	-	+	
依田	+	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	+	
山下	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	-	+	

禁断症状 (2)

	年 令	使用 期間	最使用 高量	不 眠	下 痢	発 汗	必 悸	倦 怠	四冷 肢感	流 尿	鼻過 汁多	口 渴	く さ め	振 顫	不 安	易 怒	薬欲 品求	持 続
山下	20	10ヶ月	2.0g	卅	卅	+	+	-	-	-	-	+	-	-	+	+	-	4日
石川	27	9ヶ月	1.6g	卅	+	+	+	+	-	+	+	-	+	-	-	-	-	3日
高須	19	9ヶ月	1.5g	+	卅	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	+	5日
小山	30	13ヶ月	0.8g	+	+	-	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	3日
山梨	26	10ヶ月	1.2g	+	卅	+	+	+	+	-	-	-	-	-	+	-	-	10日
松永	28	1ヶ月	0.2g	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3日
依田	24	6ヶ月	0.5g	+	+	+	-	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	4日

表 2

	山下	石川	高須	小山	松永	山梨	依田
黄疸指数	4	6.5	5	7	6	7	7
高田反応	3本	2本	2本	0	2本	5本	6本
コバルト反応	R ₆	R ₄	R ₃	R ₄	R ₅	R ₆	R ₀
ルゴール反応	卅	±	-	+	+	卅	+
B. S. P.	45分 5%以下		45分 5%以下				
R. S. G.	26~36	14~28	25~40	28~36	16~34	43~72	55~80
尿ウロビリノーゲン	卅	+	卅	+	+	+	+
白血球数	6300	7500	6100	5600	7600	7400	6200
赤血球数	380 × 10 ⁴	487 × 10 ⁴	461 × 10 ⁴	444 × 10 ⁴	354 × 10 ⁴	458 × 10 ⁴	352 × 10 ⁴
血色素量	70.0%	83.0%	89.0%	84.0%	82.0%	90.0%	81.0%
血色素係数	0.92	0.85	0.97	0.96	1.1	0.98	1.1
好酸球	4.0%	0%	3.0%	0.5%	1.0%	1.0%	1.0%
好中球桿	5.0%	5.0%	2.0%	2.5%	6.0%	4.0%	5.0%
好中球分葉	63.0%	43.5%	46.0%	53.5%	47.0%	36.0%	58.0%
淋巴球	26.0%	46.5%	40.0%	38.0%	39.0%	50.0%	25.0%
単球	2.0%	5.0%	5.0%	5.5%	6.0%	9.0%	8.0%

VI. 諸検査成績

全例に対して断禁直后より1乃至2週の間にて於て下記諸検査を行った。

1) 末梢血液 赤血球数, 血色素量の軽度の減少以外に変化を認めず, 白血球数及びその百分比に変化なく, 又壊死巣の多発して居る例に於ても白血球増加, 好中球増加, 核左方移動等を認めなかった。

2) 自律神経機能検査 4例に就いて行つた。4例共「ピロカルピン」陽性, 「アドレナリン」陽性3例, 「アトロピン」は全例陰性であつた。

3) 胃液検査 Katsch-Kalkの「カフェイン」法で4例行つた。而し一定の傾向を有しなかつた。

4) 血糖検査 1例に行つたのみであるが, 空腹時血糖 61mg/dl, 坂口食負荷后30分の血糖値 150mg/dl

で正常範囲内にあり、血糖曲線にも異常を認めなかつた。

5) 肝機能検査 血清の黄疸指数は4~7で平均6であり黄疸は認めなかつた。高田反応は3例が病的陽性で、4例は正常範囲内にあつた。「コバルト」反応は4例に右方移動を認めた。「ルゴール」反応は5例が陽性であつた。B. S. P. 負荷試験は2例に行い、2例共に45分の残留は5%以下であつた。他の症例は静脈の荒廢甚しく施行は技術的に不能であつた。赤洗値は、1時間値14mm~55mmの間にあり、平均30mm、2時間値は28mm~80mmで平均47mmであり、著明な促進を示して居た。尿「ウロビリノーゲン」は全例共病的陽性であつた。

6) 尿所見 "Ohton,, 使用直后即ち初診時尿に於ては、その色調は甚だ特有で、全例に於て葡萄酒様暗赤色を呈して居た。この色尿は "Ohton,, 中止后速に褪色を始め、1週後の尿には全く認めなかつた。その他1例に糖反応を認めたが、この糖反応も1週后には陰性であつた。尿中「ウロビリノーゲン」は色尿の存在する間は判定困難であつたが、色尿消失後の検査に於て全例が20倍稀釈尿に於て陽性を示した。諸検査成績の詳細は表Ⅱに示す。

Ⅶ. 総括並に考按

以上吾々は慢性「オートン」中毒患者7例についての検索の結果を報告したが、患者は明らかに "Oh-ton,, に対する習慣性、及び耐性の増大を示して居る慢性中毒患者であつた。中毒期間に於ける主要症状は、無為茫乎、嗜眠、記憶力減退、便秘、口渴、倦怠、食慾不振等であつた。禁断症状は、下痢、不眠、冷汗、心悸が主として認められた。即ち「オートン」中毒患者に於ける禁断症状は「モルヒネ」その他の麻薬中毒の禁断症状と類似して居るが、その程度はるかに軽い様に思はれる。中毒症状及び禁断症状に就いては、新潟大学上村教授その他の報告による所見とほぼ一致して居る。"Ohton,, 禁断后1~2週の間には於ける諸検査に於て、末梢血液像に於ては軽度の貧血を有する以外澱化なく、壊死巣の多発を認める例に於ても血球増加、好中球増加を認めないのは、この創傷が壊死を主とするものである事を暗示する。胃液検査、血糖検査では特有の所見を見ず、自律神経機能検査に於ては、「アドレナリン」、「ピロカルピン」陽性、「アトロピン」陰性であつた。尿所見中特有のものは色尿で、広島大学篠崎氏、阪大堀田氏その他の報告の如く、葡萄酒様暗赤色を呈し、断禁后速に消褪しはじめ、1週以内に完全に消失した。この色調は "Ohton,, を試験管内で酸化させて生ずる色調と極めて類似して居るので、その消褪の経過と併せ考へると、"Ohton,, 自身に由来するものではないかと思はれる。肝機能は軽度

の障碍の存在を示し、尿中「ウロビリノーゲン」が全例に病的陽性の外、高田、「コバルト」、「ルゴール」反応陽性のものが大部分であつた。

Ⅷ. 結 語

吾々は慢性「オートン」中毒患者7例に就いての検索の結果を報告した。

- 1) 中毒症状として無為茫乎、記憶力減退、発揚、嗜眠、便秘、口渴、倦怠、発汗等を主として認めた。
- 2) 入院時身体所見に於て注射部位静脈の高度の壊癢と周囲組織の壊死巣の多発を認めた。
- 3) 禁断症状は不眠、下痢、冷汗、心悸、四肢冷感等を主として認めたが、「モルヒネ」その他の麻薬の禁断症状に類似するが、その程度は軽い。
- 4) 末梢血液像、自律神経機能、胃液、血糖、血圧、尿検査及び肝機能検査に於て、軽度の貧血及び軽度の肝機能障害を証明した。

(終りに当り、大島教授の御指導御校閲を深謝します。尚本論文の要旨は、昭和29年7月18日日本内科学会信越地方会に於て発表した。)

文 献

- ①D. W. Adamsom: Nature: 167. 135, 1935. D. W. Adamsom: Nature: 168. 204, 1951. ②飯塚礼二 八木澄三: 精神々経学雑誌, 55巻5号, 644. ③紫山茂: 東京医事新誌, 71巻4号, 239. ④辻野一秋: 臨床内科小児科, 9巻3号, 181. ⑤上村忠雄, 関富治: 日本医事新報, 1530号, 324. ⑥諏訪望, 飯塚礼二, 八木澄三: 治療, 36巻5号, 581. ⑦木下豊, 佐藤孝治: 精神々経学雑誌, 55巻5号, 644.

Clinical Observation on 7 Cases of Chronic Ohton Addiction

Tsutomu Miyashita, Hiroshi Kurita
Shirin Tei, Daizi Maruyama

Department of Internal Medicine, Faculty of
Medicine, Shinshu University.
(Director: Prof. Y. Oshima)

Seven cases of chronic Ohton addiction were studied on clinical symptoms, abstinent phenomea, blood picture, function of autonomic nervous system, urine, liver function and blood sugar level.

Abulia, amnesia, agitation and lethargy were observed as psychiatric symptoms, and constipation, thirst, fatigue, and perspiration as physical symptoms.

As abstinent symptoms we found insomnia, diarrhea, cold sweating and palpitation but remarkable symptoms as observed in morphine addiction were not recognized.

Blood examinations showed on pathological changes except anemia of slight degree.

Pharmacodynamic tests of autonomic nervous system were carried out in 4 cases, all of which showed positive reaction to adrenalin and negative reaction to atropine, while positive reaction to pilocarpine was observed in 3 cases.

Urine colored with specific reddish color showed

no pathological findings in routine tests except positive urobilinogen reactino.

Sight to moderate impairment of liver function was observed in all cases.

Bood sugar level determined in one of 7 cases was normal.

Some discussions were added about these studies.

アンタブスにより誘発された癲癇の一特異例

昭和30年10月25日 受付

信大医学部神経科 (主任 西丸教授)

関 守 関 俊 子

アンタブス治療中の患者が飲酒により一過性の精神障害を起しうることは既に明らかにされている。我々も最近そんな症例を経験し、而もその現す精神症状が特異であるためにしばらく診断に苦しんだ癲癇患者の一例をここに報告する。

症 例

43才の男子、既往歴では22才の頃肺結核があつた外、特別なことはなく、家族の間にはその長男で最近癲癇と診断され当科に通院加療を加えている者を除いて変つた者はない。元来が几帳面で短気であつたが劇らかで人との交際も多く、家庭内は円満であつた。

小学校卒業後、下駄屋の職人、海軍兵役、鉄工所経営、水菓子屋、下駄屋開業、木材の売買等屢々職を代えて現在に至つているが、これは戦争、戦災により経済的不如意等の環境の影響に負うところが少くないのであつて、精神的な異常を気付かれたことはない。

酒は時々1合位は飲み、相手でもあれば5合位は飲むが、毎日飲む程の酒好きでもなく、又飲酒による異常反応も認められたことはない。

昭和28年7月6日胃の工合が良くないと云つて自ら急に禁酒を思い立ち、長野県松代町の断酒寮に入つたが、この際家人は寧ろ本人の気持を領解出来ず、何故そんなにまでして酒を止めなければならぬかと疑問に思つたと云う。

断酒寮では7月8日より0.25gr. 宛のアンタブスを10日間飲み19日にAlcoho-antabus-testを行つた。其の際は比較的早く(6~7分)酔酒し稍々強度の嘔気、四肢冷感、胸内苦悶等を自覚した。飲酒の量は焼酎を杯に二杯半であつたという。然しそれ以外に特異と思われる何等の反応を示さなかつた。

翌20日には帰宅し2日間は何等の変りもなかつたが、22日朝から「気分が洗んでいけない」と訴え、家

人にもそれと察せられる状態であつたが、夕刻に至り突然「死んでも良いから飲ませてくれ」と家人の制止を聞かず、清酒を小さな盃に半杯位飲んだところ忽ち顔面は紅潮し激しい胸内苦悶と頭痛とを訴え、床についてしまった。近くの医師に注射を受けたところその夜は良く睡眠したが、翌日目覚めると同時に夢うつゝのごとく、「兄を呼べ、俺はもう駄目だ、俺が死んだ後は皆で力を合せてしつかりやつてくれ」などとあらぬことを口走りつゝ漸次錯乱状態となり床の中で怒鳴つていたが、その夜からは家人の訴えによれば、昏睡状態となり、身動きもせず、物も云わず、外界の刺激にも感じないような状態になつたという。翌24日朝再び医師の診断を受けたが、診断は不明であつた。其の際医師が患者の近くで「狂犬病になつたも同然だ」と不用意にもらした言葉を聞いて、医師の帰宅後間もなく今度は興奮し始め、「狂犬病だ狂犬病だ」と大声をあげ、手足をばたばたさせ、部屋中を駆け廻り怒鳴り散らす。そんな激しい興奮は約1時間も続いたが漸次疲労し、翌日25の朝まで熟睡した。

25日朝覚醒したときは殆んど正常に戻り、自己の周囲に心配して泊り込んでいる親戚の人々を見て、「俺はどうしたのだろう」などと健忘を残していた。其の後は殆んど正常に近い状態であつたが、相変わらず夜間の睡眠障害と頭痛は去らず、そのために睡眠剤などを服用していたが、8月4日に信大神経科に入院した。

入院後は時々いらいらとして些細なことを若にしたり、怪しい我儘を云つたり、不安感を訴えたりすることもあつたが、其の他には特記すべき精神症状を認めず、身体的にも何等の症状なく、血液、髄液の梅毒反応はすべて陰性であつた。

ところがあと2・3日で退院するという8月10日朝5時頃一過性に不安感を訴え「先生を呼べ」と添附に